
TESTAMENT ～東の剣士～

黒ぷりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TESTAMENT ～東の剣士～

【Nコード】

N2978D

【作者名】

黒ぷりん

【あらすじ】

この物語は、此処とは違う世界での出来事である。この物語の舞台となる世界は、魔術や錬金術などの技法が栄え、戦乱や凶暴な魔獣などに脅かされ、東西南北それぞれの大陸に秘宝が眠る……まるでRPGの世界がそのまま現実になったような世界である。そんな世界の東の果てに、彼は封印されていた……

【第1章】プロローグ

暗黒とも呼べる暗闇

何も見えない暗闇、

何も聞こえない暗闇、

何も存在しない暗闇、

そんな空間にその男は居た。

彼はどんな気持ちでそこに居るのだろうか？

目を開けると広がる、

暗闇の風景。

楽しくも無く、

寂しくも無く、

恐怖さえ無い、

光さえ拒絶する永遠の闇

それでも彼はそこに居る。

束縛されている訳ではない、

彼なら出口を作れるはずだ、

だが、彼はその空間から出ようとはしない。

自身を、この何も無い空間に封印することだ、

何らかの均衡を保っているようにもとれる。

しかし、始まりがあれば終わりもある。

闇にはいずれ光が射し、彼を外へと引きずり出すのだろつ。

思い出が薄れるように、

蝋燭が尽きるように、

生が死へと移り変わるように、

永遠などというモノなど存在しないのだから……

第1話：月下戦場

……月夜に照らされし荒野、それが彼らの戦場だった。

幾重にも金属音が響き、

轟音が轟き、

大地が割れる。

激しい斬撃を繰り出し、受け止め、相手の一撃を振り払いその勢いを利用し間合いを外す。

対峙するのは蒼い剣を持つ銀の長髪の男と黒い剣を持つ黒衣の男。

彼らを中心に広大な窪みが広がっており、まるで闘技場のリングのような雰囲気だ。

窪みの周辺には生い茂る草木と奇妙に削り取られた建物があり、なにか巨大な力が働いた形跡を感じる。

二人の男は手にする剣を構え直し、相手を次の攻撃を予測し、相手の筋肉の動き、気配の変化に合わせ構えを変える。

数分その状態が続いていたが、建物の一部が剥がれ落ちた。

それが合図となり二人は駆け出す。

「ふふつ、やはり腕はおちていませんか？フェル？」
黒衣を纏った男が銀髪の男よりも早く間合いを詰める。

そして刹那、自然と狂気を含んだ笑みがこぼれ、黒く輝く剣を振った。

「……封印されたただだからな」

それに動じる事無く、フェルと呼ばれた男は、銀髪をなびかせ、蒼く輝く剣で受け止める。

思ったよりも軽い斬撃と金属音。

「なら仕方ありませんね」

黒衣の男はニヤリと笑い、黒い剣を絡め蒼き剣を振り払い、

「……！」

剣と剣の火花を残し、距離を稼ぐ。

「さて、と」

そして黒き剣で大地に円を描き、

「鬼刃、陽炎」

即座に唱え、黒き剣を円の中心に刺す。

「……！」

フェルは、急いで飛び退くも、

「ぐっ……！」

自らの影から飛び出した、無数の剣に四肢を打ち抜かれる。

「嘘はいけませんねえ？」

黒衣の男は、串刺しにされたフェルに歩み寄りつつゆっくりと語りかける。

彼はフェルの無残な姿を見て楽しんでいるようだ。

「ぐっ……何の事だ？」

フェルは四肢の激痛にも耐え、闘志を滾らせていた。

「おやおや、やせ我慢はいけませんよ？」

身体に悪い……と黒衣の男は付け加え、フェルの目前まで迫り、

「まだまだ本調子ではありませんね？」

そして月明かりに照らされ優雅に微笑むのだった。

赤交じりの黒髪、

右目を隠すような髪型、

思考が読めないキツネ目、

狂喜を隠した男がそこに居た。

「貴方もそう思いますよね？」

そして黒衣の男はフェルから視線をずらし、今まで蚊帳の外だった男に語りかけた。

黒衣の男の視線の先に気絶した女性を抱えた白衣の男が居た。

「ああ、貴方はまだ殺しませんよ？」

「その大事そうに抱えている女性も……ね？」

彼は白衣の男が返事するより早く答え皮肉混じりに付け加えた。

「大事な人柱……かね？」

白衣の男は相手の思考を探るように、ゆっくりと問いかける。

「さてさて、どうなんでしょうねえ？」

黒衣の男は白衣の男の質問をはぐらかし、再度フェルへと視線を向けようとした瞬間。

やっと諦めたか欠陥品！

心の奥底から声が聞こえ、フェルの意識は途絶えた。

「おやおや、これはこれは」

黒衣の男もフェルの異変に気が付いたようだ。

フェルの四肢を貫いていた剣が砕け、

傷口が塞がり、

銀の長髪が血で染まったように紅く変色していく。

「くつくくく……くはは」

低く唸るような野獣の笑み、

見開かれたフェルの蒼い瞳も、鮮血のような紅い瞳に染め上がる。

しまった！

心の奥底でフェルの声がする。
だがもう遅い、彼は目覚めた。

「紅き月の剣鬼……久々の登場ですか？」

黒衣の男は一筋の汗を流し、呟く。

「鬼刃剣、月蝕」

唱えたフェルの身体に無数の紅に輝く魔術文字が浮かび上がる。
それは血流のような蠢きを見せ、相手に威圧感をあたえる。

「さあ、殺しあおうぜ？魔王ベートルさんよ!？」

「ふふっ……喜んで、魔王フェル」

狂喜の笑みを掲げた二人の魔王が対峙した瞬間である。

第2話：紅と黒そして…

紅きフェルは、一気に距離を詰めようとする。

強く大地を踏み付けた軸足が地面にめり込んでいく。

だがそんな事にはお構いなしに、上半身を深く屈めて左手を右手に添え駆け出す。

「ふふっ行きますよ？」

ベートルは口元を狂喜に歪ませ素早く間合いを詰める。

「はっ正面からとはな!!！」

フェルは嘲り笑い、左手に力を込め魔力を紡ぐ。

右手に紅い輝きが溢れる。

「鬼刃剣……!!！」

フェルが唱えた瞬間、漆黒の斬撃が迫る。

「僕はあまり剣技が得意ではありませんので…」

ベートルはフェルが剣を形成する前に仕掛けてきたのだ。

「別にいいぜ？」

フェルは凶暴な笑みを浮かべ、ベートルの剣の軌道に合わせて右腕を横薙ぎに払い素手で弾き返す。

いや、素手ではなかった。

彼の腕に刻まれた、紅い魔術文字が手の甲周辺に移動し伸びて膨らみベートルの剣を弾いたのだ。

「まったく……非常識ですね」

剣を弾き返された瞬間、ベトールは残影を残しフェルの背後から再度斬撃を浴びせる。

「はっ！ てめえもな！」

今度は左手で剣を掴んだ。

紅い魔術文字が手のひらに集結し斬撃を受け止めたのだ。

「くっ 解刃！」

ベトールは意表を付かれ一瞬怯むも、直ぐに唱え、形成した剣を碎き距離を取る。

フェルとの間合いが再度開いた。

「なかなか早い、だが力はねえな！」

碎かれた剣の破片を握り潰し、左手を右手に添えて再度形成を試みる。

ベトールも左手を掲げ、静かに唱えた。

「鬼刃・影舞……四方を影に、刃をその身に……」

ベトールが唱えた瞬間、フェルの四方から影が集まり伸びて包み込んだ。

「さて、どうします？」

ベートルの声は聞こえるも、視界は暗闇で覆われ何も見えない。壁でもなくただの目隠しでもない不思議な空間だった。

「手品は飽きたぜ？」

だがフェルはそんなことにも動じず、

「鬼刃剣！！ 月光！！」

左手を添えたまま腕を大きく振り上げ、剣が形成された直後に振り下ろした。

紅い一筋の光が閃き、影が一刀両断され視界が晴れる。

「狙いどおり、掛かりましたね？」

だがそれはベートルが放つ最後の一撃の時間稼ぎに過ぎなかった。

視界が明けて視界に飛び込んだベートル、髪に隠していたもう一方の細い右目が露になっていた。

そのキツネ目をゆっくりと見開く、それは透き通った紫の瞳だった。

そして瞳がフェルを捕らえた瞬間その紫の瞳が鋭く輝き、

「しまっ！！」

「理万物眼下のすべてを消し去れ！ 『鬼刃眼・爆眼』」

ベートルが呪文を唱えた瞬間、視線の景色が消滅する。

消滅した空間に風が吹き抜け、土埃が舞う。

「ぐつつ！やはり、堪えますねえ」

右目を押さえ身体を震わす。

手から漏れ出したのは鮮血……

「見たものを消滅させる禁術『爆眼』……いやはや、僕には勿体無い力ですねえ」

ふらつき眩く。

相当な魔力を消費したのか、息が荒い。

「……まっただ」

「！？」

不意に、何処からか聞こえてきた。

目の前は土煙に覆われ、何も見えない。

「まさか……」

ベートルの眩きがキツカケとなり、土煙の中心から蒼き光が漏れ出しそれを吹き飛ばす。

現れたのは銀髪の男……フェルだ。

「……アイツも馬鹿じゃないみたいだな、「見たものを消滅させる」なら見られなければ問題ないのだろう？」

ゆっくりと蒼き剣を構えフェルは語る。

身体には蒼い輝きが満ちている。

「成る程そうですね、身体に描かれた魔術文字を壁にした訳ですか……」

ベトールは、ふらつく身体を支えながら納得。

「……その代わりに、アイツは魔力切れだがな」

瞬時に駆け出し間合いを一気に詰め、ベトールに剣を振りかざした。鼻先に蒼く輝く剣が突きつけられる。

「…返して貰うぞ?」

「はい、どうぞ」

にっこりと笑い、右手を差し出した。

「!?!」

意表を付かれたフェルの視界に、蒼く輝く結晶が映った。

「何の真似だ?」

そう言いながらも、フェルは結晶を受け取る。

「さあ?何なんでしょうね?」

受け取るのを確認すると、ベトールは意味深な笑みを残し踵を返した。

「…貴様、まさか」

「では御機嫌よう」

フェルの返答を待たずに、ベトールは姿を消す。まるで何かを企んでいるかのような表情だった。

「…何なんだいったい？」

フェルの言葉に答えられる者は居ない。
荒れ果てた荒野に穏やかな風が吹き抜けるだけだった。

第3話：魔術師の語り

窓枠から漏れる光に埃が映りこむ。

印刷紙特有の匂いが漂う。

隙間なく埋め尽くされた本棚、

……ここは書庫だ。

その片隅で沢山の本を積み重ね、床に座り込み貪り尽くすように読書に励んでいる男が居た。

彼の名は「フェル」魔王の一人であり、特殊な剣技の担い手でもある。

あの戦闘の後、フェルは意識を失いこの屋敷に運び込まれたのだ。意識を取り戻したフェルは、この書庫で自分が封印された後の歴史を調べている。

「まだ読んでいたのかね？」

フェルの近くの扉が開いた瞬間、白衣の男が言った。

おそらくこの屋敷の主なのだろう。

この書庫に案内したのもこの男だった。

「……ああ」

「……俺が封印されていた期間の事柄を知りたかったからな」
そっけない一言の後、すこし間を置いてフェルは付け加えた。

「…で、そちらのお嬢さんもそれに付き合っていたのかね？」

白衣の男の視線の先にフェルと背中合わせに座る少女。

飾りが無い大柄なワンピースタイプの服を纏い、蒼い髪を二つ分けに結び肩に引つ掛けた、物静かな少女がそこに居た。

「私はマスターの付属物ですから」

少女はチラリと紅い瞳を白衣の男に向け、表情を崩さずに語る姿は、まるで人形のような印象を受ける。

「ふむ、君はもう少し人間味のある人物だと思ったんだがな」
白衣の男は顎に手を当てなにやら考えるそぶりを見せて、

「そういえば……その魔王が眠り続けていた時に……
いま思い出したかのように喋りだした。
勿論フェルはその時の事を知らない。」

「私の事はほつといてください」
フェルが白衣の男の発言に反応した瞬間、
少女は若干表情を崩し、男の発言を遮った。

「おや、顔が赤いが？ どうしたのかね？」

「……っ」

少女はそこまで赤くはなかったのだが、男の発言でトドメを刺されたようだ。

いつの間にやら頬を染めている。

「……そこまでしといってくれ」
その姿を知ってか知らずかフェルが助け舟をよこした。

「ははっそうしよう……後が怖いからな」

「忘れていたよ、お茶を淹れたのだ、話したい事もあるから休憩したらどうだ？」

男は笑い、一つ手を打ちフェルに提案する。

「……そうしよう」

フェルは背中の少女が反応した事に気付き素直に従う。
朝早くから読書をしていたのだ、彼女も疲れたのだろう。

「では行こうか？」

男が先導となり古びた廊下を歩き出す。

「……」

フェル達は無言で男について行く。
ギシギシと軋む長い廊下を渡りながら、ふと目に付いた机と椅子が
並んだ部屋……

「……あの部屋はなんだ？」

「ああ、この部屋かね？」

白衣の男がこの部屋は教室だと答えた。
ここで教え子達に魔術を教えていたらしい。

魔術とは呪文と魔力で描かれた魔法陣で発動する魔法とは違い、詠
唱を必要としない簡略な術のことだ。

その仕組みは、自身の身体を魔法陣に見立てて魔力を練り脳内で術式を構成。
そして声を媒体にして発動させる。
非常に高度な術といえる。

「私は何のために魔術をお前たちに教えたのだ？」
男は誰も居ない教室に向かい語りかける。
二人はただ黙って男を見つめている。

「少し聞いてくれないか？」
歩き出し、男はフェルの返答を待たず喋りだす。

……それはフェルが復活する少し前の話だった。

男はフェルの封印を解く為に所属不明の兵士達に拿捕された、
もちろん抵抗した彼や教え子達だったが、魔王「ベトール」の邪眼
により成すすべなく敗退する。
自身を媒体にする魔術はベトールの邪眼は格好の獲物だったのだ。

男は言った。

……思えばあの時、ベトールは教え子達を見逃したのだろうと。
そして才能ある若い芽は自分等の利益に繋がると思い、
さらに、私という人質があり、恐らく手は出せないと

だが、一度拾った命だったが、彼の救出と魔王が封印されている遺
跡の破壊と行動を起こし、
彼とフェルが駆けつけた時には、ほとんどの者達が骸と化していた。

遺跡は半壊し大地はえぐられていた。

だがそれはベトールの仕業では無く……

男がそんな事を話しているうちに、目的地に着いたようだ。色あせた扉を開けると、

「あつ師匠！遅かったですね！」

悲惨な事件さえ吹き飛ばすかのような晴れやかな笑顔が出迎えてくれた。

この眼鏡をかけた小柄な女性が問題の人物のようだ。金髪碧眼の温和な女性が目の前に居た。

「この魔王とお嬢ちゃんを口説くのに時間を食ってな」

「あつ……」

男の後ろに居る人物を見て、彼女が押し黙るのも無理はない。

仲間達が殺される間接的な原因であり、それが自ら押し殺してきた能力が覚醒するキツカケになったからだ。

フェルが運び込まれて一週間、マトモに顔を見ず

ほとんど義務的に接していた彼女に慣れると言うのが不思議だ。

「………そうですか、どうぞこちらへ」

しかし彼女は何かの感情を押し殺して健気に対応する。

「……あ、ああ」

フェルも些か躊躇している様子、どうやら責任を極多少には感じているらしい。

「失礼します」

少女は無機質に答え、フェルについて行く。

（さて、私の「計画」に魔王は同意するのか？）

「見物だな……」

「へ？」

男は口から漏れた思考を閉ざすように口に手を当て、
間抜けな声を上げた眼鏡の女性に苦笑し席に着いた……

第4話：ティータイム

紅茶特有のいい香りが場を包み込む……

暖かい日差しが窓から差し込み、テーブルを照らす。

だが、此処の空気だけは何か寒いモノが漂っている。

おそらくこの魔王……フェルのせいだろう。

フェルは年季の入った椅子に腰掛け、静かに紅茶を飲んでいる。
その隣には蒼い髪の少女が座っている。

「……」

彼女はじっくりと目の前のお茶請けを観察しているようだ。
それは正方形の甘い香りのする物体だった。

「お、美味しいよ？」

フェルの正面に座っていた眼鏡の女性が少女にすすめる。
すすめた後、自分もそのお茶請けを頼張る。

「……」

少女は彼女の美味しそうな表情を見て、ようやく一つつまみ先っぽをかじる。

サクツとかすかな音が響き、少女は一瞬動きを止めた。

「美味しい」

そして無表情で答える。

そのまま黙々とお茶請けを頼張る。

「そ、そう……」

会話が終了してしまった。

仕方がなくフェルを見つめ硬直。

「うっ……」

フェルの鋭く冷たい視線に射抜かれる。

表情は穏やかなのだが、何か鬼気迫るものを感じる。

「……」

しかし肝心のフェルはといえば、眼鏡の女性の隣にいる三人の少年達と睨み合っているだけだった。

いや、フェルというよりは三人が睨みつけている。

彼女は三人とフェルの睨み合いに巻き込まれたのだ。

「……」

しばらく無言の睨み合いが続いたのだが、

「……ゴホンッさて、魔王が目覚めてはや三日、皆が顔を会わずのはこれが初めてだが……」

全員を見渡せる席についていた白衣の男が見かねて口火を切った。

「皆は名前を魔王に教えたのかね？」

「……いえ、先生もでしょう？」

眼鏡の女性が冷静に返答。

しかしその瞳には安堵が見られる。

「ははっそうだったな……私はドイル、ドイル・エンゲルベルト、

この孤児院で魔術を教えている」

快活に笑い、気を取り直して自身の名前を告げた。

不思議な事にそれから会話がスムーズに進んでいく。

「……孤児院だったのか？」

「ああ、まあココは魔術の才能がある者達を引き取っているのだがね」

フェルの質問に言葉を濁しながら答えた。

「そしてこの娘がミリア、ミリア・アーデルハイト、孤児院の炊事は主に彼女が行っている、」

「……で、手前からラウ、アーサー、ロツテだ」

そのまま会話の勢いを落とさず次々と教え子達の名前を伝えた。

「この三人はまだまだ未熟者でな、手を焼いている
フェルを見て、苦笑しつつ付け加えた。

実はこの行動にも訳があった。

「…確かに、魔力が微々たるものだ」

そしてドイルの読みどおり、フェルは睨みつけられたお返しにと皮肉を零らす。

「なんだとっ…！」

テーブルを叩きつけ、ラウが勢い良く立ち上がった。

「ラ、ラウ…っやっやめなよ」

それを見て、すこし大柄なロツテが気弱な声を挙げる。

しかし机に隠れた手は拳を作っていた。

「……ふんっ言ってくれるね、さすが魔王だ」
背もたれに身を預け、眼鏡をクイツッと上げアーサーが答える。

ドイルの狙いはコレだったのだ。
フェルに彼らの気性を知ってもらいたかったのだろう。
いきなり何人も自己紹介されて特徴を覚えるのは難しい。
なら何かのキツカケを与えてやれば少しは参考になるものだ。

だがこの作戦は三人に魔術師としての誇りを持ち合わせている事が最大の条件だった。
三人はある意味ドイルの試験を一つ突破したのだ。

「ラウ……落ち着け、それと魔王、忘れていないかね？」
ドイルはラウを静め、フェルに問いかける。

「……？何をだ？」

「自己紹介だ、それに隣のお嬢ちゃ……」

そこで言葉を止める。

「……ふぐ？」

ドイルの目に映っていたのは、お茶菓子を頬張りすぎて、もはやリ
スト化していた少女だった。

「……」

また沈黙がテーブルを支配する。

「ふっ……ふぐ」

付き人は耳まで真っ赤になり、

「……」

フェルは呆れている。

「あ、あの…そんなに美味しかった？」

会話に参加していなかったミアアが、おずおずと聞く。

どうやらミアアは会話に参加というより、会話に割り込む事が苦手なようだ。

「……むぐ」

少女がコクコクとうなづく仕草は先ほどとは違い、年相応のあどけなさがあった。

「……えっと、名前は？」

「……んく、私はイリス……マスターと契約した者です。」

口の中のお茶菓子を苦勞して飲み込み、そう名乗った。

「ふむ、君は魔物の類なのかね？」

「いいえ、私は中継点……本体の影です」

イリスの返答はドイルにとって衝撃的だった。

「バカな！？ 魔獣が生み出す影に自我は無いが……いや」
ドイルはそこで言葉を切る。

魔獣とは魔力の集合体のような生物である。

彼らは意思を持ち特殊な力を持っている。

だが、彼らは実体を持たない為、生まれた瞬間に消滅してしまう。
それを不憫に思ったとある者が一つの術を生み出した。

それが契約術である。

契約術が結ばれた魔獣は実体を持ち術者が死ぬまで生きられるのだ。
しかし契約にもいくつか条件がある。

一つは魔獣は術者と能力を共有しなければならぬ。

そしてもう一つ、契約できるのは自我がある魔獣だけ。

契約者が能力や力を行行使するためには、契約した人物の了承が必要
不可欠なのだ。

だが、例外がある。

「まさか……？」

「はい、私は魔王の影です」

イリスの言葉はマスターとは違う……と続いたのだろう。

数多の魔王、そして魔獣の中には中継点と呼ばれる影……つまり分身を生み出す能力を持っている者が存在する。

魔王の中継点は特別で、本体とは別の自我が生まれ自由に行動できるようになる。

さらに能力もコピーできると言われている。

「……前に言ったと思うが、俺は月の光で魔力が増加する種族だ」

「その能力はマスター自身では制御できないため、私が溢れた魔力を吸収しています」

フェルが自分の能力を告げイリスが繋ぐ。

つまりフェルは自身の魔力を溢れさせない為に魔王の中継点であるイリスと契約したのだ。

「ふむ、だとしたら月が出ていない朝はどうなるのだ？」

ドイルはフェルの能力に疑問を持ち尋ねてみた。

「魔力の増加は無くなるだけだな」

「ふむ、そういえば鬼刃剣と言うのもたしか月に関わる名称だったようだが？」

「こうなる……鬼刃剣・月光」

ドイルがさらに尋ねると、フェルはおもむろに立ち上がり右手を構えて技を唱える……が何も起こらなかった。
しかしフェルの手は何かを掴んでいるようだ。

「発動しない？ いや何かうつすらと……」

「……そうだ、俺のこの技は月の光がないとその効力は著しく低下し、このような微弱の剣が完成する」
言い終わるとフェルは席に着いた。

つまり、フェルは月の光が無いと技が使えないのだ。

合って間もない人物に重要な弱点を語るといふ事は、なにかほかの術があるのだろう。

その証拠にフェルは呑気に紅茶を飲み喉を潤していた。

「ふむ、君の技の特性はわかった、だがそれより」

「……俺の名前だろ？」

「わかってくれたかね、共に戦う者をいつまでも魔王と呼ぶには忍びないからな」

ドイルはため息を吐き、重要な事をさらりと告げた。

フェルの呑気に答える姿にも少し呆れているのだろう。

「……？よくわからんが、俺はフェル……月魔界の加護を受ける者だ」
フェルは疑問に思いつつも、自身の名前を告げた。

第5話：それぞれの思惑

この世界は、地上、天界、そして時空の歪みに存在する世界……「異界」が存在する。

魔王は異界からの使者とも言われているが、真相は定かではない。フェルが言った月魔界とは異界にある世界なのだろう。もしかすると、此処の月とフェルの能力、そして月魔界とは何らかの共通点が存在するのかもしれない。

「……ドイル、さつき共に戦うといったな？」
フェルはドイルの発言に疑問を持ち尋ねる。

「単刀直入に言おう……魔王復活の阻止に協力してくれないかね？」
ドイルは今の状況を簡単に説明した。
現在、世界各国の魔王を封印している遺跡が何者かによって解かれていると。

そしてある御方の命により、ドイルはその阻止を任されたようだ。

「だが、残念ながら私の……いや、我々の力だけでは上手くいかない」

だから協力してほしいとドイルは言った。

「……何故、俺を信用する？」
フェル自身、魔王の一人なのだ。

「簡単なことだ、君は復活した時「また過ちを繰り返すのか」っていったな？」

「ならば私達に協力して、過ちを正してはどうだろうか？」
ドイルはフェルの一言で彼が信用できる人物だと確信し、彼に提案したのだろう。

「……わかった」
しばらくの沈黙の後、フェルは短く告げた。

「……そうか、それはよかった」
緊張の糸が途切れたのか、ドイルは深く息を吐き静かに呟く。
だが安堵したのも束の間だった。

「信用できねえな」
しばらく黙っていたラウが喋りだす。
そしてフェルを睨みつけながらドイルに問う。

「先生、なんでそいつの言うことを簡単に信じるんだ？」
ラウの疑問も当然だ。
僅か数日の交流で邪悪な存在として語り継がれてきた魔王を簡単に信じるのは危険だ。
ドイルはフェルに何を感じたのだろうか？
それは彼にしか判らない。

「たしかに、だが私は意見を曲げない」

ドイルは少し考え、そしてニヤリと笑い答えた。

「ならコイツが凶悪な存在だと証明してやる！」
いきなりラウが立ち上がり、テーブルを飛び越え魔王に殴りかかった。

おそらくこれもドイルの策なのだろう。

言葉だけでは理解できない事もあるのだ。

「ちよっ！ラウ！」

ミリアの制止も聞かずにフェルに拳を叩きつける。

「……」

しかしフェルはごく自然な動きでかわした。
勢いを殺せずそのまま派手に転ぶ。

「てめえ！」

ラウは起き上がり、怒りの表情で睨みつける。

「マスター？」

「……イリス、退いている」

イリスに答え、フェルはラウに向き直る。

「あの、フェルさんっ！？ 師匠も黙って見ていないで止めてくださいっ」

思い出したかのようにミリアは師であるドイルに言った。
フェルが臨戦態勢に入った事を感じたようだ。

「ふむ……そうだな、フェルが三人に怪我をさせたら考えよう」

「へ？三人？」

ミアアの疑問はすぐに解決する。

「ラウ！受け取って！」

何処から引つ張り出したのか鞘に収まった細身な長剣をロツテが放り投げていた。

そしてフェルの左側に回り拳を構える。

額に七芒星が浮かび上がる。

「援護してやる」

眼鏡を光らせアーサーが右側に立ち、分厚い本をパラパラとめくる。アーサーの周囲に熱気が集まっていく。

「へへっ分かつてるじゃねえかロツテ！アーサー！」

そして正面、剣をスラリと抜き構えてラウ……
刃が淡く輝きだす。

ラウの魔力が剣に注ぎ込まれているのだろう。

「いくぜ？魔王さんよ！？」

ラウは突っ込み、

「紅き稲妻！」

アーサーが唱え、

「はっ！」

ロツテが打ち込む、

「……」

そしてフェルは華麗に避ける。

「…ふう」

イリスはいつの間にもやら部屋の隅に椅子を持って行き、座り込んでいる。

お茶菓子片手に観戦モードである。

ドイルの教え子達三人は、フェルを中心として時計回りに回転しながら左右正面から見事な連携攻撃を仕掛けている。

しかしフェルは数ミリ身体を動かし、最小限の動きですべての攻撃を避ける。

その度に家具や窓ガラスが破壊されていく。

「お前達、特にアーサー、魔法を使うのなら外でだな……」

ドイルは自分の墓穴を確信する。

何故なら隣のミアアの瞳に鋭いものが見えたからだ。

「……一応、家具には気をつける」

フェルはドイルの慌て様に何かを感じ、避けるついでに家具を退かし被害を抑える。

「そんな暇はねえ！」 「僕は体術は専門外だからね」 「ご、ごめんなさい」

と口はそう言っているが、三人はそれを好機と感じ攻撃の速度を上げていく。

フェルに攻撃がかすり始める。

家具や窓ガラスが障害となり活動範囲が狭くなった為だ。

「……あなた達」

そんな時、ミアアがボソツと呟いた。

彼女の背後に黒いオーラが見え隠れする。

間違いなく怒っている。

「いいかげんにしなさいっっ!!!!」
そして盛大に響く怒号。

「ひっ！」
一瞬にして戦意を刈り取られた三人

「……………」
フェルとイリスは無言いや、あっけにとられている。

「みんな、この部屋を片付けるまでご飯抜きです！」
ミアは仁王立ちで腕を組み、眉を吊り上げている。

「ええー！」
異口同音ながら三人とも素早く片付けだした。

「フェルさんも！」
ミアはフェルに箒を押し付ける。
先ほどまでの健気な態度は消え、怖じる事無くフェルに指示を出す。

「……………仕方がないな」
ノロノロとめんどくさそうに掃き掃除を始めるフェル。

「……………」
そのフェルの後をてくてく付いて行くイリス。

しかしミアにつかまり窓拭きをさせられる。

「やれやれ……今晚は夕食抜きだな」

ドイルはその様子を眺め失笑。

「なに笑っているんですか師匠？」

しかしミアは自分の師といえど容赦はしなかった。

「むっ」

「師匠も片付け手伝ってください！」

箒を突き出し、ドイルを見上げるミアは愛らしい膨れっ面だった。

第6話：月明かりに照らされ（A）

フェル達が居る孤児院から遙か北のへと進むと、そこには禍々しいオーラに包まれた城があった。

その頂上、月明かりに照らされた漆黒の玉座、そこに禍々しいオーラの根源である存在が居た。

玉座に肩肘をつき、身体中に無数のコード、計器類を取り付けられた男……

一見疲弊し憔悴しきっているかのような雰囲気だが、身体から滲み出る魔力は湯水の如く溢れ、生気に満ち溢れている。

そう、彼は眠っているだけなのだ。

『この世界に存在する生命達には、自身の中に魔力と呼ばれるエネルギー物質を内包している。

魔力は睡眠によって回復し、魔力をエネルギーとして様々な現象を起こす事が可能となる。

魔王とはその魔力の巨大さが自身の力の誇示となり、身体能力さえも魔力の影響を受けるのだ。

だが、魔王にも弱点はある。

魔力が無くなると魔王は死ぬのだ。

それを防ぐために彼らは寝る事を覚えた。

次の戦火を振り撒く為に……』

(こんな書物にも我々魔王の事が載っているとは驚きですねえ)

玉座で眠る男を見ながら、右目を隠した男……「ベートル」は読んでいた書物を閉じる。

『フェルを復活させたようだな』

その瞬間、威圧感と共に何処からか声が聞こえてきた。

「はい、我が主のご命令どつりに……」

ベートルは態度を一変し、玉座の男に向かって畏まる。

『私が言ったのは、フェルを洗脳し此処まで連れて来る事までだ』

部屋全体に、禍々しいオーラが満ち溢れる。

「……っ！ 申し訳っ」

そのオーラは密度を増して、ベートルを蝕み始めた。

『……ふんつまあい』

しかし床に膝をつき、うずくまる姿に満足したのか、ベートルは開放された。

『貴様が何を考えているのかは知らん……が、数少ない鬼刃使いと

なると話は別だ』

「ですがフェル1人を野放しにしても何の支障も無い筈ですが？」

口元に微かに笑みを含み、男に問う。

『たしかにな……だが私は絶対的な力が欲しいのだ！ そう、この世界……そして異世界までも支配する力がな！』

それはベトールにはわかっていて答えた。答えた。

(支配欲……ですか、くだらないっ！)

口元には笑みが消え、自身の細い瞳には冷たいものが灯る。

(そんな事の為に僕達を……鬼刃使いを生み出したのですか)

『次の命令だ、水の鬼刃使いの搜索を開始しろ、人選は任せる』

(こんどは「オフィエル」さんまで引きずり出すのですか……さてどうしましょうねえ?)

男はベトールの思惑に気付いていないのか、次の指令を言い渡す。

『ついでに、あの孤児院をなんとかしておけ』

「なぜです？ あの孤児院は……」

ベトールが反論するも、

『お前は命令を実行しておけばいいのだ!』

男の言葉に口をつぐむしかなかった。

「……わかりました。では、これで」

そして渋々ながら、部屋を出るのだった。

(まあいいでしょう、彼らにもいい刺激になります)

部屋から出ても禍々しい空気は変わらず、うっとうしい。

(月見のお茶としますか……)

窓から覗く満月をチラリと見て、ベトールは自室へと急いだ。

第7話：月明かりに照らされ（B）

夜……闇が支配する静寂なひと時、唯一足元を灯すのは、天高くに浮かぶ満月のみ。

「……まだ、足りないな」

そんな静寂をかき消すように、静かに呟く男が居た。

「そうですね」

相槌を打つのは、蒼い髪の少女。

草木も眠る時間に、魔王と少女は月の光が灯る草原で背中合わせで月の光を浴びている。

差し詰め「月光浴」とでも言っておこう。

二人の会話は一言二言の淡白なものだ。

「マスター？魔力の吸収が以前より落ちていますよ？」

少女は魔王をチラリと見て、呟く。

「……吸収速度が落ちているだけだ、問題ない」

魔王はそっけなく答え、少女の呟きの意味を深く考えなかった。

「ならいいです」

少女もまたそっけなく答えた。

真夜中の二人つきりという絶好の機会なのだが、彼らにとっては日常の出来事だったりする。

(あっ………そういえば)

それ故に、少女がいきなり立ち上がるとは魔王には予測が不可能で、

「……！」

少女が魔王の背中に抱きつき、

「……マスター、今さらなのですが」

「……なんだ？」

耳元で囁かれた、

「……また……」

少女の言葉は、

「……そのっ」

頬を赤らめ呟く姿は、

「また逢えて、嬉しい……です」

実に新鮮で、魔王を硬直させるのには十分効果があった。

「……………」

そして魔王の小さな呟きもまた、少女の心に暖かい何かを残した。

「……………風が心地いいな」

「はい……………」

月明かりの下、夜が明けるまで二人のぎこちない会話は続いていた。

そして翌朝、

「おはようフェル、よく眠れたか…ね？」

ドイルは書庫の扉を開け、習慣になりつつある言葉を発した。

「…ああ、おはよう」

本を閉じ、ドイルに応えた。

フェルも習慣になりつつある読書中だったのだ。

ちなみにイリスはフェルに寄り掛かって寝ている。

「…フェル、その髪はどうしたのかね？」

フェルのその髪に驚きつつも、冷静に尋ねた。

「…ああ、魔力が溜まったのだろう」

蒼く染まった髪をつまみ、まるで他人事のようにぼんやりと呟き、読書を再開する。

おそらくフェルにとってはこの姿こそが本当の姿なのだろう。

「…ふむ、なるほど興味深い」

フェルの断片的な説明にもかかわらず、ドイルは理解し顎に手を当て、しばらく黙考する。

しかし、ここに来た理由を思い出し、

「とりあえず朝食にしないかね？」

ドイルはイリスにとって魅力的な提案をした。

「……………んなっ！」

そして奇声

直後にイリスが飛び起きたのは魔王にも学士にも承知の事だったよ
うだ……………

t o b e c o n t i n u e d

【第1章】エピソード

朝の日差しと穏やかな風が吹き抜けるテラスで、食後の穏やかな時間を過ごしていた。

ミアは食器の片付け。

イリスは朝食の美味しさに満足したのか満足げな表情で、ミアの後片付けを手伝っている。

ドイルはミアの淹れたコーヒーを飲みつつ何かの書状を読んでいる。

近くの草原では、

アーサーが岩に腰掛け、分厚い本を片手に魔術の基礎練習。

ロットは拳を構え、魔力を練っている。

そしてテラスに戻りラウとフェル、

「さてと、食事も済んだし軽く稽古に付き合ってくれよ」

ほんの数日前までは何かとフェルに突っ掛かっていたラウだったが、何回かの戦闘でなにかを感じ取ったのか、以前のようなトゲトゲしさは徐々に消え、少しずつだが打ち解けてきている。

「……いいだろう」

フェルも同様に、面倒くさそうな態度はもう消えている。

「いくぜえええ!!!」

木刀を構え、フェルに向かって一直線に駆ける。

「ふむ、まだまだ踏み込みが甘いな」

書状から目を離し、ドイルが率直な感想を呟くのと同時に、あっさりフェルに避けられる。

「……む」

だがフェルの見方は違った。

「まだまだ!」

ラウは避けられたその場で身体を反転させ、連続で突きを放ったのだ。

「……成る程、成長したな」

しかしそれもフェルに見切られ、木刀はとんでもない物で受け止められていた。

「へ？ 木の枝？」

そう、それは今にも折れそうな細い木の枝だった。

「……魔力が垂れ流しだな、放出を抑えて凝固させろ」

フェルは何故か積極的にラウに指導する。

(ほう、魔法剣も使えるのか)

フェルやラウが今使っている剣術は魔力を剣に流し、切れ味・強度を増す魔法剣と呼ばれる剣術の基本形だ。

修行次第では剣に能力を持たせたり、属性を持たせる事が出来るようになる。

「なんじゃそりゃー！」

残念ながらラウが理解するにはまだまだ早かったようだ。

一時間後……

心身共に疲れ果てたラウがフェルに担がれ戻ってきた。

「あの、フェルさん？ もう少し手加減しても……」

ミリアがラウの様子を見て、そう言いかけたが、その瞳を見て口をつぐむ。

ラウの瞳には何か熱い輝きに満ちていた。

「残念ながら敵はこちらの準備が整うまで待つてはくれない」
ドイルは、押し黙ったミリアに語る。

それはミリアにとっても承知のことだが、ラウはまだ若い。

「でも、できればラウ達には戦ってほしくないんです」

私の様に……つと呟くミアは少し悲しそうな表情だった。

「……それなら戦うのではなく守る力をつけさせればいい」

フェルの発言は誰も予想できず、

「目の前で、大切な人を殺されるよりかはました」

その言葉はミアに重く押し掛かり、

「マスター……」

傍らに居たイリスは表情を曇らせた。

「師匠、ラウを連れて行きますね」

ミアはフェルからラウを預かり、逃げるようにその場を離れた。

「……言い過ぎたか？」

ミアが扉を閉めるのと同時にドイルに聞いてきた。

「いや、そうではないのだ」

そう呟くドイルは苦悶の表情が見え隠れしていた。

それからしばらくこちない会話が続いたのだが、

「……またか」

昼食のイリスの行動で氷解した。

「ふぐ」

リスの再来である。

フェルは呆れ、イリスは真っ赤になり、ミアは可笑しくてたまらないといった様子だ。

皆一様に笑い、食卓に活気が戻っていった。

普段のクールな印象からは想像できないくらいのギャップがあり、更に気付いて恥じる。
表面では人形のように繕っているが、イリスはまだ少女なのだ。

昼食後、後片付けを手伝うイリスに、

「ありがとう」

と静かにミアは呟いた。

そして瞬く間に日は傾き、夕焼けが照らす書庫で、

「明日、私の剣を受け取りに行くのだが、一緒に行かんかね？」
ドイルはフェルに提案する。

「……何故だ？」

「君に合う剣を探しに……だ」

ニヤリと笑うドイルには何か企みが見え隠れする。

「……いいだろう」

そんな企みも気にする事も無くフェルは率直に答えた。
なぜなら明日には真実が判明するのだから……

The Chapter 1 end……

【第1章】エピソード（後書き）

後書きという名の対談（何）

イリス「イリスと」

ミリア「ミリアの」

イ・ミ『もけもけてすため対談』

パフパフドンドンドン

イ「さあ始まりまして……別に始まらなくてもよかったです（ちょw）」

ミ「仕方ないですよ今回の仕様ですから（冷）」

イ「とりあえずはじめての方々も居るので少し説明します」

ミ「このすため……正式名称TESTAMENTは過去三回の執筆があり現在が四回目の挑戦となります」

イ「残念ながらすべて打ち切り」

ミ「最高が二章まででしたね（呆）」

イ「まさに人間クス（グフウ）」

ミ「恥ずかしくないのですか？（ガハッ）」

イ「……さて、気を取り直して」

ミ「キャラクターの紹介です！」

イ「今回は主人公であり我がマスター」

ミ「フェルさんの紹介です」

イ「恐らく唯一変更がされていない方ですね」

ミ「後付要素は多々あるのですが全然かわっていないですね（驚）」

イ「魔王という設定故にRPGだと厨能力です」

ミ「身体的な成長は完全に捨てて心の成長を考えていくのが今回のテーマみたいです」

イ「とはいえ一章は複線などでなかなか前に進みませんでしたね」

ミ「作者的には大丈夫みたいです」

イ「次の話では展開を少し早くするみたいですが正直あてになりました
せんよ（おい）」

ミ「では、皆様ここまで読んでいただきありがとうございます
！」

「また後書きでお会いしましょう」

END

第0話：胎動する物語（前書き）

こちらは第1話以前の物語となります。

なっ並び替えが面倒とかじゃないんだからねっっ！

第0話：胎動する物語

それは遠い過去の話……

世界が天界、地上、地獄に分かれていた時代に、

「彼ら」がいた。

彼らは地獄を支配する王を頂点に、天界に宣戦布告をする。

その戦火は地上界を巻き込み、七つの都市を滅ばした。

彼らは魔法を使い、魔道具を生み出し、魔獣を使役する。

人間は彼らを魔を極めし王……魔王と呼んだ。

「いまから千年も昔のことである。」

古びた書物を片手に、白衣を纏った長身の男が、

「魔王による支配は一部の魔王と四人の英雄達によって開放される。」

「
ギシギシと床を軋ませ、整然と並べられた机を往復する。

「だが、魔王は手強く、今もなお封印によって生きながらえている。

「……フム」

所定の場所で止まり、居眠りをする生徒を小突く。

「つてえ！何す…んだ…よ」

見上げた生徒は青ざめる。

「戦闘技能だけでは騎士になれんぞラウ？」

男は優しい眼差しと少し呆れたような表情でラウと呼ばれた少年に語りかける。

「……こんな孤児院で勉強したって騎士なんかってえ！！」

今度はゲンコツが飛んできた。

「確かに一理ある。」

男は静かに告げ、青ざめる生徒達を尻目に説教という名の講義を始めた。

「……よし、今日はこれまで！気をつけて帰るのだぞ！」
ぐったりとした生徒達を玄関で見送り、

「お疲れ様でした。師匠」
弟子が淹れた紅茶を受け取る。

「……いつもすまないなミリア」

「そんな事いつでも師匠や皆は家事が出来ないでしょ？」
ミリアと呼ばれた娘は困った様子で周りを見渡す。

部屋には各々好きなようにくつろいでいる男達が居た。

「たしかにな」「普通、魔術師は男になるものだ」「俺子供だし
」

「そんなことより魔法の習得だね」「力仕事は得意だけど……」

皆、口々に答える。

「困ったものだな」

師匠の一言で笑いが起こった。

「もっつ！」

ミアも諦め笑いに参加する。

それは東の最果てにある奇妙な孤児院の出来事であった。

この日から数日後、彼らは巨大な事件に巻き込まれることとなる。

月の魔王と共に……

t o b e c o n t i n u e d

【第2章】プロローグ（前書き）

若干グロ有ります。

苦手な方には申し訳ないです。

【第2章】プロローグ

暗鬱な風景が広がり、全身が砂に埋もれているかのような感覚……

『これは夢だ』

否、それは過去の出来事……

『そつだ悪夢だ』

自身の思考が拒んでも、その瞳は塞ぐことがなく。

『やめろ！』

叫んでも消えない心の傷跡。

それは、燃え盛る部屋での出来事だった。

目の前に蒼い髪の少女が倒れている。

薄れ行く意識でも必死に手を伸ばし、

『……っ！……っ！……っ！……っ！……』

少女の名を呼ぶ。

もう少して手が届くと思ったその瞬間、

鈍い衝撃と共に、手首から上が切り落とされる。

痛みが脳を駆け巡る。

だが、それでも少女に手を伸ばす事を止めなかった。

『諦めが悪い男だな』

その声が聞こえた時、少女は蒼い髪を掴まれ強引に立たされていた。

『絶望を味わえそして貴様は……』

天井たかく持ち上げられ、そして手を離し……

『憎しみと怨嗟で這い上がって来い』

少女の細い首筋めがけて、刃が迫った。

「……………!!」

そして目が覚める。

荒い呼吸を整え、周囲を見渡す。

周囲には本が散乱し、所狭しと並べられている本棚には本がぎざぎざに収められている。

そして傍には確かな温もり、静かな寝息をたて眠るイリスが居た。

彼女が近くに居るだけで安心感がこみ上げてくる。

「……………」

起こさないように、軽く前髪に触る。

軟らかく羽毛のような感触。

自分の口元に柔らかな笑みが零れる。

「……………」

何を思ったのかそのまま頬に触れる。

「んっ」

しかし、イリスが反応したので急いで手を離した。

しばらく彼女が起きない事を確認し、そして自身の手首を見る。

「……………」

そこには手首を一周するように傷跡が刻まれていた。

「……………慣れないものだな」

そんな事を呟き、読みかけの本を開き、読書を再開した。

窓からは朝日がちらつき、もう少しで夜が明ける事がわかった。

穏やかな風が吹き、小鳥の囀りが聞こえる。

読んでいた本が半分くらいになった時、微かにいい香りが漂ってきた。

どうやらミリアが朝食の準備に取り掛かったようだ。

「……………今日が始まったな」

いつになく長い一日が始まるとも知らず、魔王フェルは読書を楽しんだ……

第1話：出発

「今日は出かけるみたいだな」

朝日が残る草原でラウは木刀を構える。

木刀に赤く光る薄い膜が見える。

すでに日常の出来事となった朝食後の稽古、相手はもちろんフェルだ。

「……ああ、だからすこし早めに切り上げる」

フェルには時間が無いのか、ゆらりと右手をラウに向け手の平に魔力を溜めていく。

すると手の平には青く輝く球体が現れた。

「え？あつちよっ」

「……問答無用」

フェルはラウの発言を無視してその球体をラウに向けて放つ。それは轟音と共に真つ直ぐラウへと向かっていく。

「ちよつとまてえええ！」

ラウの悲痛な叫びも虚しく球体は木刀に直撃。

木刀は弾け飛び、球体に圧縮されていた魔力が破裂し周囲に衝撃を撒き散らす。

「……さて、留守は頼んだ」

フェルは一言呟き、踵を返し屋敷に戻っていく。

「うつつなんなんだあの技？」

爆心地で仰向けに倒れながらラウは眩く。
空は青空が広がり雲ひとつなかった。

「あれは魔弾です」

「あ？お前、フェルと一緒に行かないのか？」

ラウの頭上から不意に聞こえた声の主はイリスだった。

彼女は仰向けに倒れたラウに歩み寄って行く。

「……マスターの命令です」

ラウの問いに答えたイリスはすこし拗ねた表情だった。

暑い日差しが照りつけているはずなのに、汗一つかかず彼女は自身の体格を上回る程の大柄な服を纏っている。

手が半分隠れるほどの長袖の上着とロングスカートが一体となったワンピースタイプの服だ。

「早い話が留守番だな」

「ですから、とりあえず貴方のお相手でも」

「そんなに近づいていいのか？ 見えるぞ？」

「……っ！」

イリスはラウの発言に頬を染め、そして顔面を躊躇なく踏みつける。
その一撃は凄まじく、ラウの悲鳴が草原に響いていた。

その頃、屋敷の中……

ドイルが自室に戻り出かける準備をしていた。
フェルが居る書庫ほどでは無いが、古びた書物が机に積み重ねられている。

机には何かの書類が散らばっている。

「むっラウの声、……まあ大丈夫だろう」

先ほどのラウの悲鳴を軽く流し、必要な物をまとめていく。

何かの呪文を書いた札を数枚懐に入れ、数冊の書物が入った鞆を片手に自室を出た。

「……いくか？」

廊下には腕を組み壁に寄りかかっているフェルが居た。

「ん？ラウとの稽古はどうしたのだ？」

「……いつの間にかイリスが相手をしている」

フェルは不可解な返答をして、窓の外を見る。

そこにはラウとイリスの姿があった。

「ふむ、お嬢ちゃんは今とは違って容赦が無い」

ドイルは素直な感想を述べる。

「……そうだな」

フェルも同様に思っていたようだ。

……窓の外では激しい争いがまだ続いている。

「お前！ すこしは加減しろよ！」

すでにボロボロのラウ。

彼の顔や露出した素肌にはアザが見られる。顔面には靴跡がくつきりと残されていた。

「……………」

キョトンとした顔で小首を傾げるイリス。

そしてそのままの状態でひとさし指を突き出し、ラウの拳を避けながら小指程度の魔弾を放つ。

正確無比の青く輝く光弾がラウを襲う。

「ぐっ！」

そしてそれはラウに直撃すると小さな爆発を起こす。

「こんのお！」

ラウの反撃はイリスに届かず一方的な展開となっている。しかしそれはイリスが強すぎるのではなくただ単に……

「……………ラウは何故、手加減をしている？」

フェルが言ったようにラウは手加減しているのだ。

実はイリスも同様に手加減しているのだが、彼女の場合は実力差がありすぎる為だったりする。

「ふっそれが紳士というものだ」

何か納得したようにドイルは一言。

その顔には呆れと喜びが表れていた。

「……………なるほど」

ドイルの表情を見て、フェルも理解したようだ。

「さて、行くか」

「……………ああ」

先の展開が判った二人は玄関へと急いだ。
長い廊下を渡っているとき、不意にフェルが立ち止まる。

フェルの視線の先にはドアが開かれた部屋があった。

部屋の中からは話し声が聞こえてくる。

そっと覗くとミリアとアーサーが何人かの子供達に魔術について教えていた。

「今日は月に一度開かれる勉強会でな、今教えているのは町の子供達だ」

ドイルはフェルと同じように部屋を窺い、彼に説明した。

「まっそれも今日で最後だ」

「……………どういう事だ？」

「それは……………」

「師匠？」

ドイルとフェルに気付いたミリアが授業をアーサーに任せ、二人に近寄ってきた。

「すまないミリア、邪魔したようだな」

ドイルはそう言って立ち去ろうとしたが……………

「あっいいんです、ちょうど私もフェルさんに用があったので
ミリアは二人を引きとめ、フェルに向き直る。

「あの、フェルさん」

「……なんだ？」

「イリスちゃんは留守番なんですよね？」

「……どうした？」

「これを……」

フェルが怪訝に思いつつ答えると、ミリアが小さな包みを渡した。フェルの手に乗るとそれは小さな金属音を発した。

「……これは？」

「ラウの相手をしてくれたお礼……みたいなものです。そんなに入っていませんが……とミリアは付け加えた。

「いや、俺は……」

フェルが言いかけた瞬間、彼の口にミリアの人差し指が当てられる。

「いいえ、貰ってくださいね？」

ミリアはにっこりと微笑み、包みを握らせる。

「どう使うかはフェルさんに任せます」

そして今度は人差し指を突き出し、語気を強め静かにミリアは言った。

「わ、わかった」

ミリアの妙な迫力に気圧されるもフェルは答える。隣ではドイルがなにやら意味深な笑みを浮かべている。

「そういえばイリスちゃんの髪って紐で束ねていましたよねえ？」
ミリアの更なる追撃にフェルは彼女の魂胆に気付いた。
つまりイリスにお土産を贈れということなのだろう。

「……」

「そろそろ授業に戻りますね」

微笑みを返すミリアは、何か面白そうな事を見つけた表情だった。

「ああ、手間を取らせたね」

そう答えたのはドイル、彼の表情も同様だった。

二人の様子を見て、長い一日になるとフェルは直感的に感じたよう
だ。

すでに苦悶の表情になっている。

「さて、行くか」

そんなフェルの表情も無視して、ドイルは玄関へと急いだ。

第2話：暗躍

漆黒の部屋……そこはそんな言葉が似合う部屋だった。
黒い家具、黒い床、黒い壁、窓から入る朝日さえその部屋に飲み込まれそうだ。

そんな部屋の片隅で、ベートルは紅茶を楽しんでいる。

「今日の調査は成功ですね」
実に気分がいい……と呟き、しばし香りを楽しみゆつくりと飲む。
彼は今、至福のひとつときの真つ最中なのだ。

「さて、そろそろですかね」
ティーカップの紅茶が残り僅かになったとき、部屋の外からドタバタと慌しい足音が聞こえてきた。
ベートルは騒音の主に心当たりがあるらしく、静かにカップを置く。

「聞いたぞベートル！ 何故勝手に兵を東の国に送った!？」
騒音の主は扉を開けると声を荒げ怒鳴りつける。
やや小太りな身体を揺すらせ、荒々しく息を吹き出す。
そしてそのままの勢いでベートルへと向かう。

「それがどうかしましたか？」
ベートルはそんな小太りの男の姿に失笑しつつ答える。

「なんだその態度は？」
足を組み肘を突き背もたれに寄りかかる姿は、どこか小馬鹿にしているようだ。

いつまでも態度を変えないベートルに苛立ち、小太りの男は何かを

喋ろつとした。

「……………かつ……………は？」

しかし、小太りの男は喋らず何故か苦しそつに喘いでいる。

「……………僕は国王の命令に従ったままでですよ？」

ニヤリと口元を歪ませベトールは語る。

小太りの男はそこで初めて彼の変化に気付く。

「すみませんねえ、すこし五月蠅いもので……………」

ベトールの左目が見開き、紫の瞳があらわになっていた。

「ちよつと邪眼を使いました」

戸惑う小太りの男に説明するかのようになベトールは語る。

邪眼、それは呪いに分類される能力の一つである。

瞳を見た人物の魔力に干渉し、動きを止めたり発動中の魔術や魔法の阻止など用途は様々である。

一種の精神攻撃と考えればよい。

しかし残念ながらこの能力は生まれ持った能力であり、修行や何かしらの技術で習得できない貴重な能力である。

「……………あー!!」

小太りの男はさらに激昂し、腰に携えていた剣を抜こうとした。

……………が、床から無数の黒い剣が飛び出し彼に襲い掛かった。

「動くも跡形もなく引き裂きますよ？」

ベトールは小太りの男の脅え様に失笑しつつ残酷な一言を呟く。

小太りの男は無数の黒い剣に囲まれて、身動きが取れない状況だ。

彼が静かになつたのを見てベトールは口を開いた。

「では、貴方に頼みたいことがあります」
そしてベトールは小太りの男に一つの紙切れを見せ、依頼内容を伝える。

「この遺跡に行つて魔王の封印を探してください」
それは実に簡単な内容だった。
時間にして一日、ずいぶん楽な依頼である。
彼が話し終わると、黒い剣が消え邪眼の効果もなくなった。

しばらく地べたに這い蹲っていた小太りの男だったが、ヨロヨロと立ち上がり、

「わ、わかった」

小太りの男は紙切れを奪い取ると、一目散に部屋から出て行った。

「さて、これである方の命令は済みました」
静かになった部屋を見渡し、ベトールは紅茶を楽しんだ。

第3話：魔王のお買い物

フェルとドイルそしてロツテが訪れたのは様々な店が並ぶ商店街だった。

「じゃあ僕はこれで……」

「帰り道には気をつけるのだぞ」

ロツテはドイル達とは違う方向に進んでいく。その先には様々な食材が並ぶ店が続いていた。そこで彼はゴソゴソとポケットから紙切れを取り出し、食材を吟味している。

どうやらロツテは買い出しを頼まれていたようだ。

「……一人で帰って大丈夫なのか？」

「仮に襲われてもロツテなら大丈夫だろう」

フェルの疑問に答えつつドイルはロツテの向かった方向を見つめている。

ロツテはといえば何かの果物を購入している最中だった。

受け取る瞬間バランスを崩し、危うく果物を汚すところだった。

「まっ大丈夫だろう」

「……ならいいが」

苦笑しつつ歩き出すドイルにフェルは疑問に思いつつも彼について

行く。

そしてロツテと離れて数分後、フェルが不意に立ち止まる。

「……………20人か？」

「ああ、なかなか巧妙に気配を消しているがね」

ドイルもそれは判っているらしく、呑気に品物を物色しながら答えた。

「君の判断は正しかったな、お穢ちゃんを残したのはミアアやラウ達を守る為だろう？」

「……………なんだ、気付いていたのか？」

フェルはすこし驚いたように答える。

実は、ドイル達が屋敷を出る少し前から屋敷は包囲されていたのだ。ドイルが予定どおり出かけたのは戦力をこちらに引き寄せる為だったのだろう。

「まあとにかく今は選んでおけ、君の仕事だろう？」

「……………む」

町に居るうちは襲わないと読んだのか、ドイルはひとつの店を指差す。

そこは髪飾りやアクセサリーが並べられている店だった。

「剣はどうした？」

「ああ、それはこの町の近くにある山奥だ」

どうやらフェルは師弟の企みにはまっぴらしたようだ。あまり表情が冴えないフェルだったが、意を決して店に入ることにした。

……そこは別世界だった。

「……むう」

様々な装飾品や小物類が所狭しと並べられた店内。店の中には若い女性達が品物を手に取り談笑。フェルが唸るのも当然だ、明らかに浮いている。

その後、店員のアドバイスを軽く聞き流しながら品定めをする。フェルは自分に向けられる視線に耐えつつ一つの品物が目につく。

「……コレをくれ」

「それよりこっちのほうがいいと思いますよお？」

「いや、いい……」

店員が勧めた派手な髪飾りを拒み、お目当ての品物を購入。代金を支払い早足で店を後にした。

店を出ると何か開放感さえ感じる。
そのまま店の正面のベンチに腰掛けて読書をしていたドイルに近寄る。

「おお、早かったな」

彼はフェルに気が付くと呑気に応えた。

「……最近の若者の趣味に付いて行けん」

「君も若者だろう」

ドイルは苦笑しつつ本を閉じ歩き出す。

目の前の大通りのほぼ真ん中には大きな山が見えている。
どうやらあそこに目的地があるようだ。

長い大通りを歩いていくと境目の門が見えてきた。
門といっても二本の柱が立てられた簡略なものだ。

「さて、もう少しだ」

ドイルはそう言って目の前の山へと歩を進める。
山は舗装されているとはいえ傾斜があり、並みの人間なら少し息が乱れるだろう。

しばらく真つ直ぐ進んでいたが、不意にドイルは道を外れ険しい山道へと進んで行った。

「すこし、聞きたいことがあるのだが……」

「……なんだ？」

数分くらい歩いた頃、ドイルはいきなり質問を始めた。

「君の事、お嬢ちゃんとの契約の事、そして鬼刃剣についてまとめ聞きたいのだが……ね？」

立ち止まり振り返り語るドイルの表情は先ほどの砕けた表情ではなく、静かに観察するような表情になっていた。

「……………」

フェルはただ静かに彼を見つめるだけだった……

第4話：薄暗い森の中で

「君は以前、魔王ベトールと戦ったとき別の人格が表れた事があったな？」

草木が生い茂る薄暗い森の中、ドイルは静かに語りだす。顎に手をあて、フェルの様子をうかがう。

「……」

フェルはただ黙ってドイルを見つめている。

「恐らく、それは君の使う鬼刃剣が関係していると思うのだが？」

「！」

フェルの気配が揺らぎ、それと同時に静かに語りだす。

「……お前がどれくらい知りたいのかはわからないが、あまり深入りはしないほうがいい」

「ほう、何故だね？」

フェルの意味深な一言にドイルは眉をひそめる。

だがその疑問には答えずフェルは鬼刃剣について簡単に説明を始めた。

「……鬼刃とは魔術・錬金術・召喚術を混ぜ合わせた特殊な技の総

称だ。

基本は刃を生み出す鬼刃生成術。

そして個々の能力を増幅させる術がある。

俺が知っているかぎりでは、それぞれ月技・炎技・水技・風業・土業・闇業と呼ばれている。

俺が使う鬼刃剣はその技を改良して独自に編み出した技だ。」

「ふむ、概ね理解した。

だが、肝心の紅い君の事との関連は無いが……」

「……」

「わかった、深入りはせんよ。

では次の疑問だ、お嬢ちゃんとの契約だ」

ドイルは降参したかのように両手を軽く上げ、気を取り直し次の質問をした。

「契約については説明していたが、肝心の事が抜けていたね？

たしか……『媒体』だったな」

媒体、それは契約の時に用いる物質であり、契約する魔獣と相性のいい物質を用意し、それと魔獣を融合させることで初めて実体を持たせる事ができるのだ。

魔王の影も同様で、媒体無くして実体は持てないのだ。

「君のお嬢ちゃんとの契約は異端の術とも言えるな。

普通、媒体に使われるのは岩石や水などの自然物。

生物という初めから自我を持つ存在を媒介にするのは無理があるの

ではないかね？」

「…………それは」

フェルの表情が曇る。

それは彼にとつてつらい事のように見える。

だがそれでも、ドイルは自分の考えをフェルに語りはじめた。

「もしやお穰ちゃんは…………む？」

その言葉は突然の闖入者に遮られた。

フェルとドイルを挟み撃ちにするように現れた計20名の武装した男達。

既に剣を抜き放ち、各々構えている。

「やれやれ、もう少しで真相を解明できるかもしれない時に」

「…………冗談だろ？」

「冗談は半分だな、まあ語りたくない過去は聞かない主義でね」

「…………まったく」

二人は呑気に語り、背中を合わせ彼らを牽制する。

しばらく均衡が保たれ、微かな隙が命取りになるかのような緊張感が漂う。

逃げ場は無く、見晴らしが良い為に魔術などの標的にされやすい。孤立無援の戦いの中で彼らの作戦は、

「さて、どうするかね？」

「むっ……考えていないのか？」

……何も無かったりする。

「はっはっは！」

二人がどう陣形を崩そうか考えていた最中、下品な笑い声と共に陣形が割れ金色に輝く鎧を身に纏った男が現れた。誇らしげにねじれた顎鬚を携えた小柄な男。おそらくこの男が司令官なのだろう。

「貴様がドイル！、そして貴様が魔王だな！
残念だが！貴様達が実力の半分も出せないのは分かっているんだよ
！」

金鎧の男はそう言って腕を天高く突き上げる。
その手には不思議な輝きを放つ球体が握られていた。

「これは！魔道具！マジックキャンセラー！
これで貴様達は魔法が使えまい！無力な魔王と共にご同行願おうか
！」

耳障りな笑い声を更に高くし、金鎧の男は勝ち誇る。

「ふむ、剣が二本ほどあれば……」

「……二本だな？」

ボソッと呟いたドイルにフェルは答え、右足に力を込める。

「無駄無駄あ！貴様は鬼刃剣を使えないハズ……！」

「……………月技・月鏡」
ゲツキヨウ

男の叫びを無視し、フェルは技を唱える。
その瞬間、フェルの周囲に風が集まる。

「風業」

その言葉が聞こえた時、既にフェルは消え、何時の間にもやが敵陣に姿を現していた。

「なっ」

いきなり目の前に現れた片膝をついたフェルに驚き、武装した男が声をあげる。

「炎技」

男達が剣を振り上げる前にフェルは立ち上がり、炎を纏った両足で連続蹴りを放つ。

その蹴りは炎の弧を描き、男達をなぎ倒して行く。
更に両手に竜巻を発生させ、掌を近くにいた男の身体にあてそのまま突き出す。

「うおおおお……………」

すると男は回転しながら吹き飛ばす。

たとえ月の光が無くとも魔法を封じられていたとしても魔王としての理不尽な力は健在のようだ。
すでに周囲の敵は全員倒してしまった。

「……まだやるか？」

先ほどまでフェルの戦いぶりを呆然と見つめていた金鎧の男だったがフェルの発言で我に返り、

「つく！ 怯むな！ 後方部隊、ドイルを抑えろ！」

振り向きざま後方部隊に命令するも、

「ふむ、すこし重心が悪いな」

何時の間にやら両手に剣を持ったドイルが、応戦している男達を切り伏せている最中だった。

ドイルも魔術が使えないはずなのに、白衣を翻し鮮やかな手並みで次々と敵を倒していく。

「……残りは貴様だけだな」

そして数分後、その場所に立っている者はフェルとドイルそして金鎧の男だけとなった。

「さて、黒幕を教えてくださいませんか？

……まあ思い当たる人物は居るが」

ドイルとフェルは男ににじり寄り、脅しをかける。

「くっまだ俺様には切り札がある！」

「……切り札？」

「くくくっ俺様が持っているこの魔道具は実はもう一つあるのだ！」

「まさかっ」

ドイルが声を上げるのも無理はない。

こちらにいくらか戦力を割いたとはいえ、ドイルの屋敷にもまだ武装した者達が潜んでいるのだ。

「貴様の弟子はすべて魔術に特化した者達、そして更に魔王の所有物も魔術師と見た！」

金鎧の男はジリジリと後退しつつ懐から別の球体を取り出す。

「どれ、弟子達の悲鳴を聞かせてやろうか」

ニヤリと笑い、勝ち誇る金鎧の男。

薄暗い森に不穏な風が流れてきた瞬間だった。

第3・5話魔術講座（前書き）

これからイリスのターン！（黙れ）

第3・5話 魔術講座

「では皆さん、今日の授業を終わります」

教壇の前で少し目を潤ませ語るミリア。

時間は残酷にも終わりを告げ、あとは別れの言葉を残すのみとなった。

「今まで……学んだ事を忘れずに、頑張ってね……」

「先生泣かないで！」

生徒の暖かくも寂しそうな声を聞き、ミリアは最後の言葉を言った。短い間だったが教える事は十分教えた。

……逆に教えられる事もあった。

「皆さん、ありがとう！」

また会いましょうね！」

ミリアは最高の笑顔で生徒達に別れを告げた。

そんな感動のワンシーンが見られる屋敷から外に出ると、ある意味不運な二人の若者が目の前の少女の語りを不真面目にも聞いているのが見える。

「そんな訳で、ミリアさんに代わって私が魔術の指導をします」

「どんな訳だよ……」

いつもフェルとラウが手合わせしている草原でイリスは語る。
彼女の服装は魔術師がよく纏うローブにも似ているがラウとアーサーが着ている服装とは違い、生地が分厚くやや大柄なコートにも見える。

飾りが無く、彼女が着る服としてはやや不釣り合いとも思える。

「では魔術の基礎から」

「基礎かよ!」

「まっ話くらいは聞いてやるよ」

イリスの言葉に顔をしかめるラウとアーサー、彼らにとっては当然の事かも知れない。
幼い頃から魔術に精通し、基礎はおろか応用魔術をも学んでいるのだから。

「……そうですか、なら私に魔術を放ってください」

二人が不満の態度を示し、イリスもなにか感じたのだろう。
授業方法を変えたようだ。

二人から遠ざかり距離をとる。

そして両手を広げ静かに目を瞑った。

「えっ? いや俺は」

「まったく君は……」

無防備な彼女の姿に躊躇するラウ。

そんな彼を押しつけ、アーサーがイリスに掌を向ける。片手に分厚い本を持ち、魔力を練る。

「おい！ アーサー！」

「相手は女の子でも一応魔王の影なんだよ？」

その言葉を魔術にして放つ。

灼熱の波動がイリスを襲い、熱風を帯びた衝撃が走る。彼女は炎に包まれ、巨大な火柱と爆音を轟かせる。

「これが僕の実力さ！」

「なにやってんだよ！」

ラウの驚きの声にも耳を貸さず、勝ち誇った笑みを浮かべるアーサー。

しかしその笑みは束の間だった。

「……………その程度ですか」

凜とした声が響き、燃え盛る炎が吹き飛ばされる。

火の粉が逃げるように消え去り、周囲には冷気が帯びる。

「貴方は基礎が何を意味するのかご存じですか？」

現れたのはふわりと浮かぶイリス、目を瞑ったまま静かに語る彼女には身体を覆うように蒼い輝きが溢れる。

「ただ魔術を使えるだけでは魔王には勝てません」

二人はその神秘的な姿に見蕩れ、イリスがゆらりと掌をこちらに向ける事に反応が遅れた。

「魔術・魔法を使う過程で一つ目に大切な事は、魔力の凝固そして拡散にあります」

掌に小さな球体が灯る。

魔力を凝縮させた弾丸……魔弾だ。

それは徐々に膨らみ、大きさを増してゆく。

「なっオイ！」

「そっそんなものっ」

その威力を知っているラウは狼狽し、アーサーは動揺しつつも余裕の表情をみせる。

「問答無用」

イリスの言葉に反応し、魔弾が勢いよく二人に向かう。

それは高速に回転し、空気を切り裂き正確に二人を捉える。

「うわああああ！」

「くっ！」

異口同音で叫ぶも、魔弾は二人の間を猛スピードで通過し頭上へと上昇する。

呆気にとられるのも束の間、天高く昇った魔弾が高速でこちらに落下していく。

「うつ撃ち落とすぞ！」

アーサーが掌を魔弾に向けるも、思うように集中できない。魔術の構成が頭の中で紡げないのだ。

「につ逃げ……」

ラウが踵を返したがもう遅い。魔弾が近距離で破裂する。

「うわああああ！」

「いやだああああ！」

パンツと間抜けな音を出し破裂する魔弾。草原には二人の叫びだけが虚しく響く。

「……………これが魔力の拡散です。魔力を拡散させ、面で攻撃するのも魔術の基本」

二人の慌てる姿に呆れるも、淡々と先ほどの技の説明をするイリス。

「……………へ？」

「これはその応用です」

二人は彼女に騙されたようだ。

「希薄な魔力も感知できないとは」

「なっ！」

「くそっハメられた！」

「では今度はこちらを持ってください」

自分の失態を恥じる二人を尻目に、イリスは何かを差し出す動作をする。

差し出された掌には先ほどの魔弾よりはるかに小さな魔弾が乗せられていた。

「破裂はしないよな？」

「……大丈夫です」

「ラウ持ってくれ」

「おうわかつ……オイ！」

「どちらでもいいですから持ってください」

イリスは急かすように魔弾を差し出す。

「……わかつたよ」

ラウは観念したのか、自身の掌を差し出す。

「両手でおねがいします」

「？ ああ……こっか？」

不審に思いつつ両手を差し出すラウ。

「はい、どうぞ」

ひょいと軽くラウの手の器に投げ込まれる魔弾。

「うおおお?!」

しかしラウが感じた魔弾の重さは尋常ではなかった。

両手、いや両肩の筋が伸ばされ動けなくなる。

ラウはただ魔弾の重さに耐えるしかなかった。

「これが凝固です。

魔力を凝集し、威力を増す事が出来ます」

「なんだ、意外と簡単な事だったな」

「ぐぐぐぐぐ」

ラウの苦しむ姿にも気にせず、各々好きなように語る。

「貴方達は魔力の練り方だけを習っただけのようですね。それでも一応魔術は使えるので問題はありませんが……」

「基礎も大事だな……よしラウ後は任せた」

「ちよつと・ま・て・え・え!」

律儀に持ち続けるラウを尻目に、アーサーは逃げるようにその場から去った。

そのまま真つ直ぐ書庫へと急ぐ。

「……」

「……おい」

「なんでしょう」

「はやくコレをなんとかかしてくれ!」

ラウは耐えかねたのかイリスに助けを求める。

「……はい」

そして魔弾をひょいと持ち上げる。

そんな彼女の姿に驚きつつも、脱力感が押しよせその場に座り込む。

「あーもう腕が上がらねえ!」

「もう少し鍛えたほうが良さそうですね」

真上でイリスの声が聞こえる。

ラウはすぐに見上げて反論するも……

「は？ 俺が今までどれだけ……」

「……？」

言葉に詰まってしまった。

「どうしました」

「なっなんでもねえよ！」

日差しを遮り、覗き込む彼女。

光加減のせいかもしれないが、その時ラウは見たのだ。

彼女の笑顔を……

「まあいいです」

疑問に思いつつもイリスはラウに手を差し伸べる。

「立てますか？」

「ああ……」

ラウは一瞬、手を出そうか考えるも、イリスの手を取らず無理矢理立ち上がる。

「怒ってます？」

「そんなんじゃないねえ」

ラウはぶっきらぼうに答え、さらに気まずい雰囲気になる。

その時……

激しい音が鳴り響き屋敷から悲鳴が聞こえてきた。

「ラウ?」

イリスが反応するより早く、ラウは駆け出していた。
向かうのは屋敷の中。

「ミリア姉!」

ドアをぶち破りミリアを探し奥へと駆ける。
イリスも追いかけてよとしたが、何者かによって阻まれる。

「おおっと! 貴様は通行止めだ!」

「……」

何時の間にやらイリスは武装した男達に囲まれている。

「空間移動ですか?」

「そんなものだ」

彼女の目の前には銀色に輝く鎧を纏った男が立ちはだかっていた。

「君は魔王の影なんだろ？」

「そして魔術師でもある」

「……それが？」

イリスが掌を構え銀鎧の男が何かを掲げる。

「これで発動系の魔術は封じた」

「！」

掌に現れていた魔弾は消え、意表を突かれたイリスは動きを止める。それを男達は見逃さなかった。

「今だ！」

彼女の四方に棒を突き立てる。

するとそれらは輝きだしイリスの周囲の空間を歪ます。

「あぐっ！」

そして彼女は地面に叩きつけられた。

周囲の重力が倍以上に増大し、身動きが取れなくなったのだ。

「ふふふっこれで動きも封じた！」

銀鎧の男の不敵な笑みを残し、屋敷に入っていく。

ラウが奮闘しているのか屋敷からは喧騒が響いている。
だが先ほど使われた道具を使われたら最後だ。
イリスは苦渋の表情を浮かべる。

「マスター……」

草原にはイリスだけが残される。
屋敷からは徐々に喧騒が消え、周囲には不穏な静けさが広がる。

「じめんなさい……」

イリスの言葉は草原に静かに消えていった。

第4・5話：鉄系の戦姫

いつの頃だったのか……それは私にはわからない。

燃え盛る家、砕けた大地。

不必要な殺戮をくりかえす者達。

斬られ殴られ倒れていく人々。

そして傷つきながらも私に手を伸ばすマスター！。

これは恐らく私の身体の記憶……

思い出すだけで体中が痛み、悲しみ怒り憎しみがこみ上げてくる。

マスターも同じなのでしょうか？

失う悲しさはこの感覚なのでしょうか？

……わからない。

でも、私にも失いたくない方達ができたようです。

「マスター」

だから、

「ごめんなさい」

私は全力で使命を果たします。

イリスが静かに呟いた瞬間、轟音と共に地面から巨大な四角い鉄柱が突き出し、四方に突き立てられた棒が吹き飛ぶ。

重力が消え、立ち上がったイリスには変化があった。

彼女が纏っていた服の袖が無くなり雪のように白く細い腕があらわになっていたのだ。

「……集いなさい」

両手を挙げ静かに呟くと鉄柱が解れ縮み糸のようなモノへと形を変え、イリスの腕に集う。

そして更に糸と糸が絡み合い立体的な物質を編みこむ。

四角い棒状の物体で端より上のほうに持ち手がある鈍器……トンフアーだ。

イリスの服も糸がほつれてゆき、スカートは大きく開き腰巻きのようになりショートパンツを履いた白い脚が晒される。

上は肩まで露出し、あまった糸は首元を守るように銀のプレートが形成される。

腰巻きには白い縁取りがされこちらのほうが飾り気がある。
おそらくこの姿がイリスの本領発揮、戦闘装束なのだろう。

「……」

両手にトンファーを携え、イリスは静かに屋敷へと入っていった。

一方、屋敷の中では……

「さて、お遊びもここまでだよガキども？」

「くそっ」

「う……ぐ」

「ラウっ！アーサー！」

縛られたミリアを片手に、気絶したアーサーを踏みつけ得意げに語る銀鎧の男。

その近くでは家具や窓ガラスが散らばった床にラウが倒れていた。
彼の身体には無数の切り傷と打撲の後。

悔しげに銀鎧の男を睨みつけ起き上がろうとするも、周囲の男達に

殴られる。

「ぐっっ！」

「やめてっ！ ラウはもう動けないのよ!？」

ミアアの悲痛な叫びは男達に届かず、彼が気絶するまでその行為は続けられた。

最初はラウとアーサーに押されていた男達だったが、銀鎧の男が持つ魔法道具によつて状況が一転する。

後方で支援していたアーサーは魔法道具と背後からの不意打ちで、ラウは魔法剣を封じられ更にミアアを人質にとられ、なす術がなかった。

「魔術師とはまったく無様だな。」

魔法を封じられただけでこんなにも無力とは!」

「放してっ！ ラウ！ アーサー！」

「暴れるなっ！ おい……ガキを縛り付けておけ!」

暴れるミアアを突き飛ばし、近くの男に命令する。

彼女は遠くまで飛ばされ激しく床に叩きつけられ、しばらくぐっぐっまっていた。

「……二人の治療をさせてください」

しかし彼女はゆらりと立ち上がり、声のトーンを落とし静かに訴えた。

乱れた髪で表情がよく見えなかったが、魔法を封じられた彼女の最後のあがきに見えた。

「それは出来んな、また暴れられても……」

銀鎧の男もそう思い、ミアアの訴えを拒んだのだが……語り終える前に言葉を止めてしまった。

……彼女には不自然な現象が起こっていたのだ。

「貴様……なにをした？」

縛られていたはずの彼女の両手には縄は無く、そして床にも縄はおちていない。

そして彼女の立っている床にも変化があった。

「……そこを退いてくれます？」

足元に散らばったガラスの破片、飛び散った木屑がミアアが一步を踏み出すたびに粒子となって消滅しているのだ。

「なんだ貴様は！」

銀鎧の男の声にも自然と恐怖が表れる。

そしてミアアが近づくと同時に自然と後退りしてしまう。取り囲んでいる男達も狼狽しその場から動けずにいる。

「……ふ……ふふっ」

ミアアは不気味な笑みを口元に浮かべながらゆっくりと歩を進める。
そして彼女が、なにか眩暈とした瞬間、

轟音と共に銀鎧の男の背後の壁が吹き飛んだ。

「クソッ今度はなんだ!？」

土煙が晴れ現れたのは、戦闘装束を纏ったイリス……

「貴様どうして……」

「……申し訳ありませんミアアさん、すこし壁を壊してしまいました
た」

銀鎧の男の声を遮り、倒れているラウヤアーサーを一瞥し呑気にイ
リスは語る。

だが言葉に似合わず背後には大穴が開き青空が覗いていたりする。

「……へ?」

先ほどの変貌が吹き飛び、やや間抜けな声を出してしまったミアア。

どうやらイリスはミアの変化を感じ、このような行動を起こしたようだ。

「……大丈夫ですかミアさん？」

「お、おかげさまで」

「ラウとアーサーは頑張っていたのですね」

「ええ……でも私のせいで……」

「いえ、悪いのはこの者達です」

「でもっ……」

敵陣の真っ只中でもイリス達の能天気な会話がしばし続く。呆気にとられていた男達も我にかえり、各々体制を立て直し臨戦態勢へと移る。

「貴様ら……」

「準備が出来たようですね……ではこちらから」

またもや銀鎧の男の話を遮り、イリスは彼の前に急接近する。

「なにっ」

その素早さに身体は反応できず、ただ声だけが漏れる。

「マスターからの命令は「殺すな」だけ……つまり生きていれば大

丈夫ですよね？」

イリスの囁く声が聞こえた瞬間、銀鎧の男の右腕が釣り上がる。何が起こったのか理解する前に今度は左腕が引っ張られる。

先ほどまでイリスが持っていたトンファーの片方が消えている。

そう、彼女はトンファーを鋼鉄の糸へと戻したのだ。

そして鋼の糸によって吊り上げられた銀鎧の男の背後には、いつの間にもやら金属の格子が現れていた。

これも彼女の技の一つなのだろう……

「昔は格子ではなく糸だったんですが……」

そんな事を呟きながら目の前のイリスがトンファーを構え、そして勢い良く突き出す。

「ぐぶおっ!!」

腹部と背中に衝撃が走り銀鎧の男は声にならない叫びと共に吐血する。

背後の格子は銀鎧の男がめり込んだようにひしゃげ、イリスの強力な一撃を現しているようにも見える。

「むっ……汚いです」

銀鎧の男が吐き出した血液を避けるようにイリスは立ち退き、糸を回収しトンファーへと形成する。

糸が消え支えを失った銀鎧の男は膝立ちになり、そして血を吐きながら床に崩れ落ちる。

「これなら……細切れにならないので、残念ながら生きていますね」
意識が朦朧とする最中、銀鎧の男が聞いたのはイリスの残忍な一言
だった……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2978d/>

TESTAMENT ~東の剣士~

2010年10月21日07時02分発行